

義妹・浩美 ～その青くて卑猥な下半身～

直輝／NAOKI

第一章

友人たちには就職活動を始めたものもいるが、僕は相変わらずのんびりしていた。

やりたいことが見つからないのは、僕の年頃にはよくあることだが、生まれて二十二年間もやりたいことが無かった僕の人生っていったい何なんだろうと考えることもある。

しかし、平々凡々な人生を歩んできたわけではない。

中学三年のときに両親が離婚した。両親の仲が悪く、親父の浮気が原因だった。

僕は母に引き取られた。

その母が僕の叔母でもある母の姉に見合いを勧められ、とんとん拍子で再婚することになった。

義理の父もバツイチで、娘がいた。当時小学校三年の浩美だった。

初めて義父と会ったとき、義父は浩美も連れてきた。

浩美は可愛い女の子だったが、男で一つで育てられたからなのか、気がめっぽう強かった。

やがて母が再婚し、四人で同じ屋根の下で暮らすようになった。

浩美は我が家の中心的存在だった。気が強く怒りっぽい浩美は父親の言うことなど聞かず、好き勝手なことばかりしていた。

それに、同年代の女の子と比べると、かなりませていたほうだと思う。

兄になった僕にさえ、えらそうな口調だった。しかし、そんな妹でも僕は可愛いと思っていた。

当時、思春期真っ盛りの僕は、浩美は妹というより、性の対象だった。

入浴前、脱衣室で服を脱ぐ浩美を盗み見したこともあった。その後、自分の部屋に戻って、浩美の裸体を思い出し。いきり立ったペニスを扱いて若い性を処理してしまったこともあった。

でも、浩美には秘密があった。彼女はバイセクシャルだったのだ。

僕が初めてそれに気付いたのは、三年前、僕が大学に入った頃のことだ。

浩美は当時中学三年生。家に浩美の友達遊びに来て、手を繋いだり、抱き合ったりして、異常に仲がいいと言う感じだった。

思春期に入ったばかりの女の子が妙に女友達とベタベタするのは知っていたので、最初は特に気にも止めなかった。

だが、ある日、浩美が玲子という友達を部屋に連れこんだ時のことだ。

僕の部屋は妹の部屋と隣あわせだったので、となりの声がよく聞こえるのだ。

漫画を読んでいると、しばらくして、隣から、「んっ、ふう」とか言う変な声が聞こえて来た。

「まさか……」

小声で妹たちが何か言っているのも聞こえて、僕はとんでもない事が隣で起こっているのではと想像して変な気分になった。

部屋の外に出て妹の部屋のドアの方に回って、もっとよく聞こうと耳をドアにつけた。

絶対エッチな事していると確信した。

僕のペニスも勃起していた。

でも、結局中の様子はわからなかった。しかし、そのあと、浩美の友達玲子は、変に照れたような、よそよそしい感じで帰っていった。

当時は、思春期の憧れというか、ママゴト程度の行為だと思っていた浩美の行為が、高校に入学しても続いていたのだ。

ある日、街で友達と、しかもかわいい女の子と手を繋いで歩いている浩美を見た。女の子同士はただの友達同士でも手をつないで歩くことはあると知っていたが、浩美の場合、何と言うか、雰囲気が違うと感じた。

その上、浩美には半年続いている彼氏もいるのだ。

でも、最近、その彼氏と大喧嘩したらしい。

僕は心の中で、「このまま別れろ」と強く願ってしまった。

実は、僕はこの義妹が好きだったのだ。

浩美は、夏休みは毎日遊び呆けていた。義父が注意しても夜遊びをやめず、いつも夜遅くかえって来ては、義父に叱られていた。

両親が離婚してからよく義父に反抗していたらしい。

しかし、僕の母とは妙に仲が良かった。母親が必要な年頃なのだろう。

しかし、夏休みも終わりに近づき、浩美もそろそろ課題をやらなきゃいけない頃になってきた。

僕は、率先して浩美の勉強を手伝おうと思って、ある日、浩美にその事を言った。

浩美は、「え、ほんとに？」と驚いていた。

「かわいい妹がバカになったら恥ずかしいからな」と、誤魔化して言ったが、夜遅く、浩美の部屋に入るための口実だった。

実は浩美が中学に入ってから、僕は殆ど浩美の部屋には入った事が無かった。

久々に入る妹の部屋は、かなり女らしく、コギャル的な部屋だった。なんだか良い匂いもして、とっても甘酸っぱい気分になった。

取り敢えず、数学の課題を見てやった。思ったより難しかったが、がんばってやり遂げた。

実は、浩美のTシャツの胸元を覗いてどきりとした。座った浩美を上から覗き込むと、胸のふくらみの根元が見えた。浩美は人並み以上のおっぱいだった。

その後、部屋をくまなく見渡して、何か男の写真とか、レス疑惑に繋がるものが無いか探したが、何も見当たらなかった。

次の日も同じように部屋に行き、浩美の胸を覗き込んだ。白ブラだった。

浩美は僕に感謝してくれて、「オニイ大好き」と言ってくれた。

兄として好き以外の意味はないと思うが。

そして、翌日、浩美が朝から遊びに行くと話したので、僕は浩美の部屋を探ってみようと計画した。

九時ごろ浩美が出るのを待って、こっそり浩美の部屋に潜入した。

すぐに机に向かって、引出しを開けた。

一つだけ鍵の掛かっているところがあったが、後は簡単に開いた。日記みたいなのは全く無く、しかしその代わりに手帳を発見した。今年の三月までの手帳だった。

ゆっくり読もうと思い、隣の自分の部屋に戻って、中を見た。

彼氏とのプリクラ写真がたくさん挟まっていた。

胸にズーンと響いた。

そして、予定が日ごとに書かれてあったが、卒業式とかいてあった次の日、ハートのマークみ
たいなのが書かれていて、そのマークが、以後時々記入されていた。そして、それが書かれて
いる日に、彼氏または、友達の女の子と会う予定が書かれていた。

このマークはひょっとしてエッチのあった日の印なのでは？と、疑惑が湧きあがってきた。すると、彼氏はともかく、女の友達と会った日まで印があるのは、やっぱり、浩美はバイなのか？と、さらに疑惑が広がった。

その日の夜、勉強を見てやりながら、浩美に敢えて明るい声で、冗談っぽく聞いた。

「なあ、お前、こないだのケンカどうなったんだ？」

「ケンカって何？」

「お前、彼氏とケンカしてただろ？」

「ああ、あれね、仲直りしたの」

浩美が簡単に言うので、また僕の心が暗くなった。

「ふーん、仲がいいんだな」と、なんでもないかのように言うと、浩美は「まあね」と言った。これで何となく話が恋の話になったので、僕はとことん聞いてみる事にした。

「いつから付きあってたっけ？」

「去年の秋。受験生だったのにね」

「そっかー。なあ……」

僕はどきどきして体を少し震わせて、「もう、やったのか？」と、小声になって聞いた。

そしたら、浩美は、「え？ どういう事？」とか聞くので、僕はやけになって、「えっちした？」と聞いた。

そうしたら、浩美は真っ赤になって、「オニイ！ 何言ってんのよ！ 妹に何聞いているの？ バカ！」と、叫んだ。

大声だったので、両親に聞こえると思い、「しー！」と言った。それから、お互い小声で話をした。

「それなら、オニイから言ってよ。五つも上なんだから、かなり経験あるんでしょ？」

浩美は逆に僕に振ってきた。

実際、僕はバイト代をもらうと、そのままソープランドに行くほど当時風俗にはまっていた。しかし、素人女性との経験はなかった。いわゆる素人童貞であった。

しかし、僕は見栄を張って、「これまで付き合ったのは三人かな？」と浩美に嘘を言った。

「まあ、オニイも男だから。それなりにはあるんだね」と言うと、今度は逆に、浩美が興味津々で聞いてきた。

「どんなことしたの、ねえ、教えてよー」

そこで僕は、何となく立場が良くなったと思い、浩美にこう言った。

「お前の事教えてくれたら教えてやるよ。したのか？」

浩美はむっと、しばらく睨んでいたが、ついに、「してる」と、ぼそつと言った。覚悟していたが、ショックだった。

「セックス、したのか？ いつから？」

僕は問い詰めた。そしたら、やっぱり、「今年。卒業式の後」と言った。あのハートマークが、

やっぱりエッチの印だったんだとわかった。

「ほら、言ったからオニイの番だよ！」と浩美が言ったので、ヤケクソになって、ネットで読んだ他人の経験話をした。

悔しい気持ちを吐き出すように.....。

僕の妹の浩美に対する気持ちはその日から膨れ上がって言った。大学から疲れて帰ってきてても、何かと理由をつけては浩美と話したり、理由をつけて浩美の部屋に行ったりした。

それからしばらくして、妹は、また彼氏と上手く行かなくなってきた。何かにつけてはケンカになるみたいだった。

「あいつはすぐ嫉妬すんのよ。で、私がぼろっと元カレの話したら、そんな話するなどが、むかつく事言うの。オニイどう思う？」

浩美は愚痴を言い続けて、僕は、「そりゃあ、だめだな、そんな小さい男とは別れろ」と、別れて欲しくて言った。でも浩美は、「でも、やっぱり好きだし.....」とか言うのだった。

僕は五つも下の十七歳の子供みたいな義妹に気持ち的に振り回されているような気がして、イライラしてしまった。それで、冗談ぶって、聞いた。

「どうして別れないんだ？ エッチが気持ちいいのか？」

僕がそう言うと、浩美はまた赤くなって、「またそんなこと言って！ オニイホントにスケベね

っ！」と言った。

構わずに突っ込んで、「どんな体位でしてるの？ あいつのちんぽ長いのか？ 何センチ？」と言った。

僕はからかうつもりだったのだが、何と浩美も乗ってきた。それには驚いた。

「そんな.....あんまりっていうか、全然体位とか変えないんだけど、ただ、ガって突かれるっていうか.....」

「なにそれ、芸無いな。ちんぽは何センチ？」

「大きい時は.....うーん、十一、二センチくらいかな？ そんな、計った事無いからわからないよお.....」

ちなみに僕のは勃起したら十八センチくらいになる。

「ふーん、で、エッチは気持ちいいのか？」

この時点で僕はパンパンに勃起していた。声も震えていたが、気付かれないようにした。

「うーん、気持ちいいかな.....」と、感じてるのが良くわからないような感じだった。

僕はついに言った。

「オニイはえっち結構上手いって言われるぞ」

もちろん、僕は風俗嬢としかえっちしたことがなかったので、これは嘘だった。でも、浩美は意外と興味を示した。

「え、ほんとに？」

予想外の浩美の反応に、僕は調子付いて続けました。

「おお。ちんぽもデカイし。お前の彼よりかなり長いぞ。体位も知ってるし」

「ふーん、オニイやりちんなんだね。凄いエッチしそう」

会話がかなり際どくなってきたので、僕は勇気をもって詰まりながら話し続けた。

「た、試してみるか？」

すると、浩美は、「ば、バカ！ 何言ってるのよ！」と、かなり取り乱した様子で、慌てた言い方をした。

「冗談だよ、冗談」

僕は笑ってかわした。さすがにこれ以上はまずいと思い、今回はここまでにして退散しようとした。

ただ、その時、浩美が意外なことを言った。

「オニイは年上だから大人だし、優しいからタイプかも……」

僕は舞い上がって部屋に戻った。パンツを下げると、チンポの先がヌルヌルになっていた。

もっと浩美と近づきたい……。

僕はそう思った。

（体験版はここまでです。本編を買っていただけると嬉しいです。よろしくお願いいたします
す。）